

# 『我が身にたどる姫君』の「密通」

——我が身姫を起点として——

大塚千聖

はじめに

『我が身にたどる姫君』は十三世紀後半の成立とされ、全八巻という中世王朝物語屈指の長編作品である。複雑な関係の恋情や嫉妬、男同士の友情を通し、錯綜した人間関係を軸に、七代四十五年にわたる天皇家・摂関家の歴史を描き出す。

本作品では形を変えて繰り返される「密通」が重要なテーマであると考えられる。しかし題名の由来となっている我が身姫は、男君から思いを寄せられることはあっても誰かに思いを寄せることはなく、恋愛や「密通」を経験しない姫君として描かれている。彼女は、関白と皇后の宮の「密通」の末に誕生した不義の子ではあるものの、自らの素姓を理解した後は我が身帝に内内し国母となり、女の栄花を極めている。そのために先行研究では、我が身姫の存在が薄く主人公と言えないのではないかという指摘も存在する。

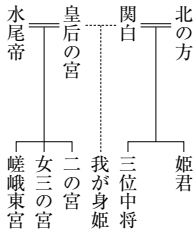
確かに我が身姫自身が当事者となることはないが、彼女の近辺では「密通」が多発しており、他人の「密通」や恋愛に対しては決して無縁ではない。さらに娘を「密通」まがいの事件で亡くしており、寧ろ彼女の人生は「密通」に振り回された人生と言える。そこで本

稿では「密通」が本作品を貫く一つの主題であると仮定し、従来脇役に徹していると捉えられがちであった我が身姫との関わりを明らかにしたい。

## 一 形代となる我が身姫

我が身姫は音羽山で尼上や側近の女房たちと生活を共にしており、幼少期は尼上が母親であると信じて疑っていなかった。しかし尼上が俗世を離れてから二十年以上が経過しているにも関わらず、自らの年齢が十四・十五歳であることを不審に思い、出自に疑問を抱くようになる。

【系図一】



中世王朝物語において、不義の子は父方の家に引き取られること

が多い。<sup>2)</sup>しかし皇后の宮の場合は、「密通」の手引きをした女房・宮の内侍が亡くなっていたために、関白に姫君の存在を伝えることができずにいたのである。

卷一末尾で皇后の宮から我が身姫の存在を告げられた関白は、すぐさま我が身姫を迎えに行き、周囲の人間に悟られぬよう慎重に、手元に置くための準備を行う。我が身姫の身の振り方は、皇后の宮と関白の間で取り決めされたため、彼女は関白が迎えに来る理由を知らなかった。関白は、我が身姫を一目見て涙にむせぶ。

〔関白が我が身姫を〕うち見つけ給ふより、くれまどひ給へる御涙のけしき、いつしかゆゆしき御掟を、(我が身姫は)またこはいかになりける世ぞといまさらにかなしきそへて思しまどはるるに、世語りの隠れなきにつけても、やうやう思ひ合はせらるる身の行方には……  
(卷二・六十七頁)

涙の理由は、我が身姫が亡き皇后の宮に似ているためだと考えられ、このような関白の様子と女房たちの噂話から、我が身姫は自身の父親が関白であることを理解する。関白は彼女を対に住ませた後も、「(北の方腹の女君を)かく重き方にはいみじうもてなし給へど、(我が身姫に)うち添ひ給へる心やすさぞ、かばかりはあらぬをも……」と北の方腹の女君以上に我が身姫を大切にしており、関白にとっての我が身姫は、皇后の宮を思い出す形代として機能している。我が身姫が音羽山を出る契機となったのが、関白の息子・三位中将と皇后の宮腹の皇子・二の宮による垣間見事件であった。三位中将は音羽山で「柱隠れに見つけざりし」と直接顔を見たわけでは

かったため、関白が引き取ってきた我が身姫が、音羽の姫君と同一人物であることに気が付かない。同父妹に対して愛情を抱くことはないため、彼の視線はかねてからの思い人であった女三の宮に集中する。音羽の姫君への思いが消えたわけではないのだが、音羽の姫君と我が身姫が同一人物ゆえ、実在しない存在への思いとなり、成就する可能性は立ち消えている。

三位中将が密かに思いを寄せている女三の宮は皇后の宮の娘であり、我が身姫とは同母姉妹だ。二人の容姿は、当人たちが「かたみにあさましうぞおどろかれ給ふ」ほど酷似していることが記されている。しかし三位中将は、二人の酷似を不審に思うものの血の繋がりを疑うことはなく、

……あやしう(我が身姫を)見奉るにつけて、いとど(女三の宮への)思ひさましがたきゆゑなむ侍る。なめげなる心ならばこそあやしとも思し召されめ、ただかばかりをあはれに行方なかりける契りのほどかなとも、のたまはせ慰めよ。さてだにかへとどめ侍らむ」とて、御袖を引き寄せていとけ近きに……  
(卷三・一三三頁)

と女三の宮への物思いから、我が身姫を前にして取り乱してしまう。三位中将にとっての我が身姫は女三の宮を想起させる形代として機能しており、この父子は共に、我が身姫の姿を通して皇后の宮の血筋の女性を想起しているのである。

当初、自分と女三の宮が酷似していることを知らなかった我が身姫は、三位中将の態度に困惑するだけであった。ところが女三の宮

と対面して事情を察すると

あやしううたて思されしすちも、やうやう心得給ふには、けにいとほしう心苦しければ、さるべきふしぶしもいふかひなからず思し分くさまなれど、うちかすめかうこそともけしきもらさむにかたはらいなければ、ただうち嘆きてぞあいなう苦しき思さるる。

(巻三・一四二頁)

と三位中将が自分と女三の宮を重ね合わせることはもつともだと理解を示しており、自身が形代であることに自覚的であるのに加え、波線部のように自らの素姓を明かすことができずに心を痛めている。女三の宮から三位中将との関係を打ち明けられた際も、気の毒には思いながらも、「かくなむともうち出でむにさかしうつきなかるべきを」と真実を告げることを躊躇い、二人の間で板挟みとなつていく。女三の宮との対面を通して母親が皇后の宮であることを悟り、長年の疑問であつた自らの素姓を完全に理解したものの、悩みがそこで尽きることはなく、新たに三位中将と女三の宮との間で板挟みとなつた「心苦し」さを抱いているのだ。

女三の宮との対面は、我が身姫に母の血を強く意識させるとともに、自身に思いを寄せる皇后の宮腹の二の宮と同母関係であることに気が付く契機にもなつた。女三の宮と三位中将の「密通」と同時進行で我が身姫と二の宮のやりとりが語られる中で、二の宮に迫られた我が身姫は、

かぎりなく思しまどへるものからさまよくしづめて、あさまし

とあはめ給へる御けはひのいみじうめでたきを、え堪ふまじく引き動かしてもぎ取らまほしきに、なほ人近なるがわりなきにや、この戸口を出でなむとするを、女のすべてめづらかに心憂しと思ひまどひ給へるに、え出でやらず。(巻三・一四九頁)

と心を落ち着かせ二の宮をたしなめる。兄妹間の道理をわきまえ、二の宮に毅然と対応した我が身姫の性格が「密通」を回避し得た要因であることは明らかだが、「もぎ取らまほしき」とまで思い乱れている男性を女性一人で防ぐことは困難である。ここで活躍するのが、我が身姫の側で休んでいた侍従である。

とかく引き動かすけはひさすがにいとしるきを、我が御方に聞きなしていとめづらかなれば、ふと寄り来ぬ。ありし宮(二の宮)なりけりと思ふにいとそろしければ、恥を捨ててただ御手にぞ取りつきぬ。いみじき男と聞こゆれば、女のせちにとらへたらむにはいか引き放ち給はむ。……(侍従が)鬼のやうにまつはれ聞こゆれば、せむ方なくて……(巻三・一五〇頁)

「密通」の回避には、事情をよく知った女房の存在も鍵となる。<sup>(4)</sup>侍従の咄嗟の判断と行動力のおかげで、我が身姫は二の宮との「密通」を完全に回避することができたのである。

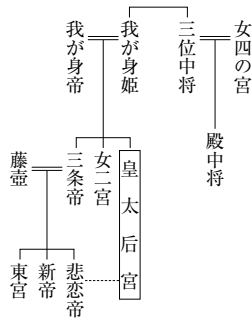
我が身姫は、男君にとっては皇后の宮の血筋を想起させる形代として機能していた。同母姉妹との対面を通して、自らの出自を正しく理解し長年の疑問を解決したうえに、同母兄とのタブーを回避していく冷静さを持った人物とも言える。しかし自らの素姓を理解し

た代償に、三位中将と女三の宮の双方に、真実を告げられないもどかしさを抱くようになってしまったのである。

## 二 娘たちに影響を及ぼす我が身姫

我が身姫は入内後に息子一人と娘二人をもうけ、息子の後宮に對してのみならず、娘二人の身の振り方にも我が身帝以上に関与した。当初は、「大宮（我が身姫）の御掟、けしからぬまでけだかく掲焉にもてなさせ給へる」と、二人の娘に皇女不婚の原則を徹底させようとしていたが、結局妹の女二の宮を殿中将に降嫁させている。

【系図二】



歴史上では、平安時代末期から鎌倉時代にかけて皇女不婚の原則が徹底されており、非現実の世界を描く物語でのみ皇女降嫁は描かれていた。<sup>6)</sup> 我が身姫は、巻五で女二の宮を殿中将に降嫁させた際に

今女院（我が身姫）は、はかなき世を思し召し知るにつけてやうやうおとなしき御心も添ふにや、いかさまにもてなし聞こゆ

ともしさまにつけてなほ思し悩むにやありけむ、女二宮、左大将（殿中将）に譲らせ給ひつ。（巻五・二十九頁）

と、どのような身の振り方を考えても様々な問題が生じるであろうから、と消極的な理由で降嫁に思い至っている。一方で、姉の一品の宮には未婚のまま皇太后宮の位が贈られた。二人の姫君には性格の相違が見られた。

二の皇子（ママ）<sup>7)</sup> は、おのづからいはいけなき方まじらせ給ふにや、絵物語につけてをかしきふしを御覧じ知るさまにもあり。これ（皇太后宮）は、すべて召し使ふ人につけても、はづかしうつつましきものにのみ思し召し、さま悪しう人に馴らされず、もの遠くおはしませば……（巻四・一九四頁）

女二の宮は、絵物語を通して恋愛における男女の機微をも学びとっている。皇太后宮も絵物語に親しんでいなかったわけではないのだが、姉妹における絵物語享受には差が見られ、この差が後の皇太后宮と悲恋帝との「密通」もどきの事件への伏線となっている。

娘の教育に関し、「絵物語」が挙げられているが、我が身姫自身も音羽山で暮らしていた際、

うちかすめのたまふこともなきを、我さかしう問ひ出でむにつきなしずちなければ、ただおほかにもてなして絵物語などに慰み給へど、それにつけては例なき身のあはれに思さる。

（巻一・十四頁）

と絵物語を愛読していたことが描写されていた。尼上と自らの年齢から出自に疑問を持ったものの、その疑問を口に出すことも憚られて絵物語に徒然を慰めようとするのである。傍線部「例なき身」は、「おのづから片つ方はうちそひ、思ふさまならぬたくひあれど、かう二道に行方なきやうやはある」と両親揃って不在な状況のことで、我が身姫はこのような状況が絵物語にも例を見ないと嘆いている。心の慰めになるはずの絵物語によって、却って彼女自身の「例なき身のあはれ」さを強烈に自覚させられてしまうのである。

徳満澄雄氏は、女性と物語との関わり方について

世間話しもせず、体験もない深窓の女性が、世間、特に男女のこまかな事情を知るには、物語を読むより外に道はなかつた時代である。物語を読むことにはもちろん娯楽的な意義もあつたが、他面、物語の中から、このような場合には如何にあるべきかを学び取っていることに注意されたい。物語のよしあしの問題はさておき、教育的な意義もあつたのである。これを徹底させたものに女訓ものとよばれる、女の身の処し方を教えた書物があり、源氏物語をはじめとする物語から、その登場人物の性情、素行などを例示し、理想的な女の生き方を教えている。<sup>(8)</sup>と述べている。我が身姫が詠んだ

いかにしてありし行方をさぞとだに我が身にたどる契りなりけむ  
(巻一・一一頁)

は、『源氏物語』匂宮巻の薫詠

おぼつかな誰に間はましかにしてははじめもはても知らぬわが身ぞ

を踏まえている。しかし、「さにやと聞き奉りし人も、もの見分くばかりにては、また見聞こゆるときもなし。なほ世にやおはすらむ、亡くなりけむもさだかに知らず」と語られていたように、我が身姫は父・関白に引き取られるまで、一度も実の両親に対面したことがなく、母・女三の宮の側に行くことができる薫とは大きく異なる。さらに、

……かけても思ひ寄るべき身のうさかは。何ごとの報いに、我が身ひとつにかかる契りのあるべき。……(父も母も)まことに思ひ寄るすぢならば、誰もいかなる御心にてか、足の立たぬ蛭の子とはしづみあるべきと、うちかへし思ふも、げに心得られず、ものがなしきことぞ多かる。(巻一・十三頁)

と自らの境遇を嘆いている。「足の立たぬ蛭の子」とは、『日本書紀』「神代紀・上」で語られる伊邪那岐と伊邪那美の間に誕生した蛭子神のことを指す。蛭子神は、父と母の手によって葦船に入れられ流し捨てられた。我が身姫は自身が蛭子神のように、父母から見捨てられたと考えている。我が身姫は、絵物語から親子の例を見出し自らの境遇と比較することで、両親ともに不在な状況が不自然であることに気が付き、素姓を知りたいとこれほどまでに強く願うようになったのである。

皇太后宮は、甥の悲恋帝に強引に契りを結ばされてしまった翌朝、

女院（我が身姫）などに思ひ嘆かせ奉らむに、常のためしに思  
す二宮などのやうにて長らへむよ。ただ死ぬるよりほかのめや  
すきことはあらじ

（巻七・一七三頁）

と、『狭衣物語』の女二の宮に自らの状況を重ねている。「常のためし」とあることから、狭衣大将に婚前の状態で契りを結ばされた女二の宮のような皇女が決して異例ではないと考えており、やはり「密通」を警戒する我が身姫の意識は、娘の教育にも色濃く反映されていたと言えよう。

我が身姫の「密通」を警戒する意識は、自身が不義の子であるという認識、入内前に女三の宮・三位中将の恋愛に関わったこと、二の宮に強引に迫られたことなどに起因していると考えられる。しかしながら、この事件以前の我が身姫は

女院（我が身姫）などの、さばかり男の影とてめざましくお  
そろしきものにのみ思したるも、これ（悲恋帝）はただ稚児の  
思ふさまにうつくしきとのみ思し召しあたつけば、「かくこ  
の御方（皇太后宮）をむつまじう思し召したるこそ、うれしう  
思ふやうなれ……うらもなき御けしきの、同じことと聞こゆる  
中に、いみじう思ふさまにおはします」などのたまはせて、い  
かで御心にはなむことをと、時のほどにも、絵物語・見えぬ  
さまなる御物の具など取り出でさせ給ふを……

（巻七・一五五〜一五六頁）

のように、幼い悲恋帝を皇太后宮に好意を寄せる一人の男性として意識していなかった。そればかりか、「うらもなき御けしき」と悲恋帝の心中を完全に見誤っているのである。皇太后宮の自死は、彼女の行動を制止できるような女房が不在であったことも原因の一つであるが、それ以前に我が身姫の影響が非常に大きかったと言える。我が身姫は「皇太后宮の御ことの後、尽きせぬ御嘆きに弱らせ給ひ」と巻八で亡くなる。彼女のように母親の立場で苦悩する女院は、同時代の作品『風に紅葉』や『いはでしのぶ』にも見える趣向で、野村倫子氏は

『いはでしのぶ』は白河院の一品宮が二つの『いはでしのぶ』の恋に関わり、その二つ目、世代が替わって女院となつてからは母の立場で苦悩する。故内大臣との娘は関白北の方となつているが、いとこの右大将が恋情を寄せ、女院は恨まれつつも娘への恋を防ぎ通し、結果として右大将を出家させる。また『風に紅葉』では、まだ後の宮であつた時代に、大将の北の方となつていた娘の一品の宮が宰相中将と密通、出産後急逝する悲劇に見舞われる。

と二作品を整理し、さらに

『我身にたどる姫君』巻七の事件は、『風に紅葉』に近似的であるが、一方で『いはでしのぶ』の反転といえようか。我身女院は政治を捨てた三条院の生母であり、娘の皇太后宮に対する宮の中将の恋慕に激怒し阻止したものの（巻五）、元服したばかりの新帝からの横恋慕は防ぎきれず宮に早世される（巻七）。

と指摘する。



景殿参内↓女帝崩御

●卷七

三条院の女帝思慕↓新帝即位↓藤壺、新帝の朝覲行幸に付添い  
三条院へ↓藤壺、三条院に迫られ契りを交わす↓藤壺懐妊  
↓**〔C〕**三条院、藤壺の元に暫く滞在↓**②**後涼殿密通↓藤壺出産  
(子…第三皇子) ↓後涼殿懐妊・出産(子…初草姫君) ↓皇太后宮と新帝の事件↓皇太后宮崩御↓悲恋帝崩御

**〔a〕**の背景

三条帝即位後に最初に御子を懐妊したのは、寵愛が一番深い後涼殿ではなく藤壺であった。この懐妊を受け承香殿は藤壺に遠慮し里がちになるが、承香殿を気にかけて三条帝は、歌を贈り宮中に戻るように促す。承香殿と再会した三条帝は、彼女の許から離れようとせず、後涼殿の許を不在にしてしまう。その間に後涼殿は宮中將によって強引に契りを結ばされてしまった。

三条帝はもう一人の女御・麗景殿にも関われないでいた。承香殿が上の御局から退出するのと入れ替わるように後涼殿が三条帝の許に戻ったため、麗景殿は、忍びこんできた人内前からの恋人・殿中將を拒むことなく「世をいたう思ひ乱れ給へるほどぞ心苦しきや」と関係を持つ。

**〔b〕**の背景

卷四末尾で、「院は中宮(後涼殿)具し聞こえさせ給ひて、故院のおはしまししましに移ろひおはします……中宮の御おぼえありし

よりけにて、ただ人のやうに並びおはします……」と描写されるように、退位した三条院は後涼殿と生活を共にしていた。一方の麗景殿は「宮の女御のみぞ世のなかを思し乱れて、よろづ人笑へに思さるれば、女宮(女一の宮)おはしませばそれに心を慰めて、里にぞ籠りおはする」という状況であった。彼女は里居の最中に忍んできた殿中將と再び関係を持ち、懐妊する。

**〔C〕**の背景

懐妊発覚後に里下がりをしていた藤壺の許に三条院が訪れる。「残り少なき御対面にもあらむと心細く思されるままに、このごろは、ひたすらうらうらととうつくしき御もてなしには、(三条院は)例の分くる御心もうち忘れて、この宮がちにおはしますも……」と、藤壺の軟化した態度に三条院は藤壺の許を離れられなくなる。三条院不在の隙に、再び後涼殿は宮中將によって強引に契りを結ばされる。

以上のことから、三条後宮を巡る「密通」は、**①**三条帝が「密通」の当事者以外の后に関心を移し**②**三条帝が当事者となる后の側を離れ**③**その隙をついた男君が行動することによって引き起こされている。重要なのは**①**で、三条帝の不在は政務や他の事件ではなく当事者以外の后たちの存在が契機となっている点である。つまり、三条後宮で「密通」が行われた原因は、后が四人も乱立している状況にあると言えるのである。

では何が原因で四人も后が入内することになったのか。作中で麗景殿の入内に続いて描かれるのが、嵯峨院の思惑である。彼は一



人娘・承香殿の身の振り方に関して、「動かなき御位をとのみ思しなれば……」と降嫁ではなく入内を強く望んでいた。当初は三条東宮ではなく、我が身帝への入内を打診していたのだが、

我が御代はいとかりそめにのみ思し召さるるうへに、たはぶれにも分くる御心しおはしまさねば、東宮にこそはと思し召すも

……  
(巻四・一八二頁)

と我が身帝から息子・東宮への入内を勧められる。我が身姫を寵愛しており、彼女以外の女君の入内を受け入れたくないというのが本心であろう。しかし、「氏（藤原氏）のほかの後は、女院いみじう御諫めあるにより」と自分の娘の東宮入内を望む水尾女院が強く警戒しているため、結局身動きがとれずに事態は膠着してしまふ。そのような状況を打破するきっかけとなったのが、三条東宮と後涼殿の契りであった。二人の関係を知った我が身姫が外野から働きかけたことで、最終的に後涼殿は東宮に入内するが、二人の関係を知り怒った女四の宮が我が身姫に対抗する形で、母・水尾女院の力をもつて自分の娘・藤壺を入内させた。その後、「我が世の末なくてやみぬる御あはれみにもとて、押し立ち思し召し立ちてまた参らせ給ふ」と嵯峨院が些か強引にことを運び、承香殿も入内するのである。

三条後宮の人間関係は後冷泉後宮を参考として造型されていると考えられるが、四人もの后がいる異常な状況は、娘の入内を狙う親世代の権力争いが生み出した事態である。この権力争いは承香殿の入内を拒否した我が身帝、ひいてはその原因となった我が身姫の存

在に端を発しており、我が身姫が後涼殿入内を画策したことで表面化したと考えられる。

なお、親たちの勝手な事情や思惑が娘の将来を決める状況は、三条後宮だけでなく、嵯峨後宮と我が身後宮にも見られた。嵯峨帝には関白北の方腹の女君（嵯峨中宮）が、嵯峨帝の同父兄弟・我が身帝には我が身姫が、それぞれ入内した。関白の妹・水尾中宮は、嵯峨中宮を自分の息子である我が身東宮に入内させることを求めているが、我が身姫を嵯峨帝に入内させてしまふと異父兄妹の禁忌を犯すことになるため、関白は嵯峨中宮を嵯峨帝に、我が身姫を我が身東宮に入内させ、嵯峨中宮は娘一人を、我が身姫は息子一人、娘二人をそれぞれ出産した。この時点で我が身東宮の次に東宮となるのは、我が身姫腹の三条東宮となり、嵯峨統を途絶えさせないためには承香殿が天皇の元へ入内し、男皇子を出産することが求められる。承香殿は父帝の意向で三条東宮の元に入内するが、女御として寵愛を受けても結局子を成すことはなかった。

三条帝には、藤壺との間になした皇子たちがいるために、そのまま自身の子に譲位することもできたが、

嵯峨の院の御心掟をはじめ、皇后の宮（承香殿）の御ことをなほいとみじう思ひ聞こえさせ給ふあまり、かの御末の世におはしまさぬもいとほしう思し召さるるにより、昔も例なきにあらずと、御位を譲り聞こえさせ給ふ。  
(巻四・二二五頁)

と、嵯峨系統を途絶えさせないためあえて承香殿に譲位することを決めている。喜んでいるのは嵯峨院くらいで、当の女帝は「あるべ

ききとも思しかげざりし御位を思はずに所せく思し召し」と快く思っていない。女帝の治世は善政であると評されているが、本人が望んで帝位についたわけではないことはもっと考慮されるべきで、さらに我が身姫が皇后の宮の血筋を引いているがゆえに、引き起こされている事態であることも重要である。

### おわりに

我が身姫は巻一から巻三において、皇后の宮によく似たその姿から閑白には皇后の宮を、三位中将には本来の思い人である女三の宮を想起させる「形代」として機能していた。彼女は素姓を理解すると同時にそれを明かせない苦しみを抱き、正しい血筋の理解に助けられ作中で唯一「密通」を回避するが、娘を「密通」まがいの事件で失う。同母兄・二の宮に迫られ、女三の宮と三位中将の恋愛を間近で見た過去の経験から、我が身姫は「密通」に対して強い警戒心を抱いていた。娘たちには「狭衣物語」女二の宮など絵物語の例を挙げながら、自身の「密通」観を色濃く反映させた教育を施したものの、その教育が却って仇となり皇太后宮は自死を選ぶこととなってしまう。皇太后宮の悲劇は我が身姫からの連鎖性をもっていると言えるのだ。

巻四以降の「密通」は、三条帝が「密通」の当事者となる后以外に心を移した一瞬に行われており、四人の后がいる状況こそが「密通」が起こり得る原因であったと考えられる。四人もの后が入内する状況は親たちの権力争いを背景に、我が身帝が我が身姫以外の女君の入内を拒み息子・三条帝の元への入内を勧めたことに端を発し、三条帝と後涼殿の私通を知った我が身姫が後涼殿の入内を画策した

ことが原因となっている。つまり巻四以降の「密通」が行われた状況は、我が身姫が作り出していると考えられる。

以上から本作品における「密通」は、不義の子である我が身姫が実父の元に引き取られた後、入内という形で皇統に取り込まれたことよって展開していると考えられる。自身の出自を理解した後脇役に徹していたとされてきた我が身姫だが、彼女の存在によって物語が動かされているのである。

本文の引用は、全て『中世王朝物語全集20 我が身にたどる姫君・上』及び『中世王朝物語全集21 我が身にたどる姫君・下』に依り、私に傍線や○を付した。

注① 徳田美穂『我が身にたどる姫君』小考―人物造型を中心に―(『平安文学』七七号・一九八七年五月)

② 神田龍身『鎌倉時代物語論序説・仮装、もしくは父子の物語』(『日本文学』三五号・一九八六年二月)

③ 宮崎裕子『姉妹への恋』(『国語と国文学』八三―一・二〇〇六年一月)は、「現存する中世王朝物語の中では、近親婚・近親相姦の禁忌は破られていない。それはおそらく物語の不文律なのであって、中世王朝物語において、(姉妹への恋)は、決して成就しないという前提で描かれているのである」と、異父・異母関係なしに兄妹間の性的関係が忌避されていたことを指摘している。

④ 本作品では、男君と女君とのやり取りだけでなく、男君と女君付の女房とのやり取り(会話)に筆を割く傾向が見受けられる。今後の課題として、本作品の「密通」と女房の関係についても調査したい。

⑤ 三田村雅子「いはでしのぶ物語」(『三谷榮一編『体系物語文学史』第四

卷』有精堂出版・一九八九年)

(6) 注5に同じ。三田村氏は物語中に描かれる皇女嫁について、現実では不可能となっていたゆえに「物語の中でしか実現不可能な、はるかな憧れと化していたのである」と指摘している。

(7) 引用部分では「二の皇子」とあるが、巻四・一八二頁に我が身姫が「東宮の母后、並ぶ方なき御おほえにて、一品の宮・女二の皇子さへ生み続け給へるぞ」とあり、男の皇子ではなく姫宮であることがわかる。

(8) 徳満澄雄『我身にたどる姫君物語全註解』(有精堂・一九八〇年) 五一頁

(9) 蛭子神の故事は、『日本紀竟宴歌』大江朝綱詠の「父母はあはれと見ずや蛭の子は三歳になりぬ脚立たずして」や、『源氏物語』明石巻の「わたつ海に沈みうらぶれ蛭の子の足立たざりし年は経にける」にも見られる。

(10) 仮に皇太后宮存命で、方が一妊娠していた場合は悲恋帝への入内が可能であったし、子を成さなかった場合は事実を隠蔽することで事なきを得られた。しかし不婚のまま皇太后宮の位につき、我が身姫の理想を体現していた彼女にとって、「密通」のような強引な契りの衝撃は計り知れないものであったに違いない。そもそも二人は叔母と甥の関係で、年の差は十四歳程度と想定される。関係を知った三位中将は、「げにこればかりこそは、我が御心にえ任すまじきわざなめれ」と我が身姫に助言を求めようとするうえ、皇太后宮自身も「見苦しくあるまじきほどにて、ただ世の常にかくぞ聞こえ給はまし」と言っており、まったく有り得ない関係ではないことが示されている。また、歴史上では後深草天皇が、実際に叔母の西園寺公子を中宮としている。以上のことから二人の関係は厳密には「密通」ではないと考えられるのである。

(11) 野村倫子「物語の「女院」再考」(『平安文学研究・衣笠編』和泉書院・二〇〇九年)

(12) 我が身姫と同父姉妹の嵯峨女院が先に立后した際の「我が身」東宮は(我が身姫への)あまりの御心ざしゆゑあかずいとほしうぞ(嵯峨女院を)羨まれさせ給ふ」巻三・一五六頁 という箇所からわかる。

(13) 金光桂子「我が身にたどる姫君」の描く歴史(上)」(『国語国文』六九一九・二〇〇〇年九月)